

ふんやぶ、風

第107号 (2015年4月)

風に吹かれて (85)

白井啓治

『春なのに不穏の風の吹いて気鬱する』

今年に入ってからというもの人間社会には何やら嬉しくない、不穏ともいえる妙な風が吹いている様な気がしてならない。テレビ、新聞、インターネットに得られる情報を知れば知るほど穏やかならぬ気分になってしまう。

特に我が国の舵取りの方向を見ていると、果たしてこれで大丈夫なのかと、心配以外の事を考える隙間のないほど不穏な気配を感じる。政治の舵取りというのは未来への希望を見据えていなければならぬ筈なのであるが、絶望を強いるような方向へ方向へと向かって行っているように思えてならない。

今年は、敗戦70年を迎える。小生、終戦という表現よりも敗戦という表現を選択する。終戦とは戦争の犠牲を強制された市民の早く終りにしてくれという願いの言葉として捉えるのが適當するもので、戦争を作った日本という国としての立場に立ったときには敗戦というべきであろう。

こんなことを言うと、勝てば官軍なのだから勝てばいいのだろう。負けない戦争ならばいいのだ、という馬鹿な事を言う人が必ずいるものである。

現に今の政府の向かおうとしている先には勝てば官軍を志向し、負けの言葉は存在していないようである。しかし、戦争には人道的にみると勝敗はないのである。勝者においても敗者においても、弱者である市民の犠牲と被害という悲劇しかそこには無い。

敵をつくる(想定する)ことで、民衆の結束を産もうというのは人間の最も愚かな知恵であろう。愚かな知恵を持たないのが民主政治というものであるが、我が国のリーダーと称する者達の今を見ると、民衆が一寸白けて目を逸らせた隙に愚かな知恵を使おうとしているように思えてならない。もしかしたら明日明後日には、原爆も使わなければ持つても良い、何故なら使わなければ兵器ではないから、などの解釈が出てくるかもしれない。

因みに、国際法上からみた日本における終戦とは、サンフランシスコ講和条約が発効をもって戦争が終結したことになるのだそうである。そうすると国際法上の終戦は、1952年4月28日ということになる。2年間の空白期間は、連合国の占領下ということになる。

春風が、例年よりも早く吹き始め春の花が咲き始めたのは、終末観を暗示するかに思われてならない。

東日本大震災から4年になった。大震災の復興は少しずつではあるが前に進んでいる。ところが、福島第一原発で被害を受けた周辺地域では、全く進んではない。むしろその被害は、じわじわと広がっているといえよう。為す術がないというのが事実であろう。

除染作業は進んでいるとは言いが、除染されたわけではない。汚染土を集めたに過ぎない。しかもその汚染土や廃材を処理することが出来ないでいるのである。当りまえではあるが、仮置き場を作ったからと言って汚染物がなくなるわけではない。放射線の無害化技術があるわけではないのだから。

だがそんな中で、原発再稼働への動きは加速している。ベースロード電源の確保にとつて原発が不可欠の立場を変えないのは、単なる電源の確保以外の目的を持っているに違いない、とわざわざ知らせようとしているのではないかと穿った見方をされても仕方のないような動きである。

先日、当風の会で、8月に行うギター文化館での原爆投下、敗戦70周年記念イベントとして行われる、映画「ひろしま」の上映会に向けての関係者試写会を行ったが、不穏な世界情勢の中、この試写会を通して色々な話しを行うことが出来た。

映画「ひろしま」を通して、また切っ掛けにして、人間と戦争、原爆の悲劇、原発の是非など色々な対話の生まれる事は、非常に重要な事であると思う。

人は言葉を持って対話する事でしか平和を作り上げるができないのだから。対話を拒否した中からは破壊行動しか生まれないと云える。

筑波山麓一帯は平国香から分かれた平氏系豪族が支配していたと思うが鎌倉時代以降には源頼朝に従った武士団の子孫の領地になっていた。其の一人であり宇都宮・八田系の小田氏一族と思われる越幡六郎信親（おぼたろくろうのぢちか）も石岡市小幡近辺を領有して室町幕府に仕え、鎌倉公方・足利持氏の管領（かんれい・將軍補佐の最高位）を務める上杉氏憲入道を主筋としていた。

藤原系の中流公家である上杉氏は、源氏滅亡の後に將軍となつた皇族に付けられて鎌倉に来たらしく、足利尊氏の母親（上杉清子）が出てから室町幕府に重きをなしていたのである。出家した氏憲は禪秀と号し室町幕府鎌倉府の実権を握っていた実力者であり、石岡に居た大掾満幹も禪秀に服従する証しとして自分の息子が居るのに禪秀の四男（教朝）を一時的ではあるが養子にしている。

上杉禪秀の主人である足利持氏は自分の為の正義感が強い人物なので自分が鎌倉府の長で有ることが気に入らない。同じ足利尊氏の子孫なのに京都組は室町幕府の將軍になれて、鎌倉組は將軍の下「鎌倉管領」にしかねないのが不満なのである。

そこで勝手に制度を変え鎌倉府を幕府と同格にして自分を「公方（くぼう＝將軍）」と呼ばせ、本来は番頭の上杉氏を「管領（かんれい）」にした。

そのぐらいの人物であるから政治も公正にはいかず気分次第で賞罰を行うようになる。應永二十三年（一四二六）の春、越幡六郎が病氣の為に鎌倉府への出仕が出来なくなつた。欠席届は出したのだが公方に諂（へつら）う人物が居て仮病だ！など

と言いつけた。

単純な持氏は是を真に受けて越幡六郎の領地没収を命じた。持氏にしてみれば禪秀の存在が目ざわりなので此処で抑えておきたかったのである。しかし禪秀は「およそ国家を治める道は仁慈道徳を本として寛大温和を行うべき…」として越幡六郎の処罰に異を唱えた。しかし何と言われても持氏は越幡六郎を許さない。領地没収に追放刑をプラスして実行させた。

禪秀は鎌倉公方に愛想をつかせて職を辞した。持氏は喜んで、禪秀のライバルであった上杉憲基を早速に鎌倉管領に任命した。上杉一門でも扇谷・詫間、犬懸、山内の流派間対立が芽生えていたのである。

禪秀は此処で怒らないと怒る場面が無い。病氣と称して引き籠り、密かに同志を集めて馬鹿公方と其の一味を討つ計画を立て、諸国から武器を集めた。この計画に加わつたのは千葉・新田・渋川・那須・宇都宮・倉賀野などの関東武士団、武田・小笠原など甲斐、信濃武士団、曾我・土肥など伊豆の武士団と奥州の蘆名、白河、そして常陸国では小田、小栗の諸豪族、大掾氏も是に加わつた。

應永二十三年（一四二六）十月二日、反乱軍は鎌倉に集まって足利持氏らを討つ計画であったが間一髪で逃げられた。反乱の成功例は聞かないから此の場合も予定どおりに行かず、翌年の正月に反乱首謀者四十余人が鎌倉の寺で自殺して一件落着にされた。

石岡の大掾氏は鎌倉から逃げ戻って知らない振りをしていたのだが、東北の佐竹氏が勝ち組の上杉氏と密接な関係にあったから忘れた頃に鎌倉へ呼ばれて行き、生きて戻って来ることは出来なかつた。

それでも同族の後継が許されて戦国時代まで残つたが結局は佐竹に滅ぼされた。

騒動の発端になつた越幡六郎の消息は不明であるが、石岡市小幡を舞台とした小さな出来事が歴史的事件の発信源？にされた珍しい例である。

「テロリズム」考

菅原茂美

イスラム国（以下IS）により、日本人フリージャーナリストなどが拉致され、殺害された事件は、あまりにも大きな衝撃であった。

なぜそこまでやるのか？ 人間としての「慈愛」の心のかけらもなかつたのか？…ジハードはコーランの勝手な解釈ではないのか？

同教徒は日本にも10万人おり、東日本大震災後ボランティア活動もしてくれた。世界16億人の教徒は他宗教をも容認する「寛容さ」をもつ。六信五行の敬虔な信徒なのになぜ暴徒化したのか？…

【断わっておくが、私はイスラム教徒が残酷だと言っているのではない。暴力を正当化しているムスリムの一部が、道を外していると言っているのだ。移民など社会格差がその根底にあるのか？ なお、これから述べる文中、数字を挙げて述べたデータは、インターネットなどから引用した。】

*

さて私は、いつも「人間の本性」とは、いかなるものか？…と考え続けている。

原初の生命誕生以来、周囲から栄養となるものは、なんでもかき集め、己の成長と生殖機能を獲得し、生命に充ちた惑星へと発展してきた。

地球は46億年前に誕生したが、40億年前誕生した、おそらくただ1個の最初の細胞が、現在の全ての生物の元祖である。単細胞生物も、植物も、そして動物も……。それゆえ周囲の仲間さえ、自分が生き残るための「栄養的成分」であつたはず。いわゆる弱肉強食は、最初の生命誕生以来の、全生物に後継された「生き物の本性」なのである。

それゆえ、いかに進化を遂げた現在の高等生物においても、人類においても、その残忍性は受け継がれているのかもしれない。決してテロリストを擁護するつもりは毛頭ないが、人間の本性を辿れば、そんなところに遠因があるのかもしれない。

ある種のクラゲは自分より小さな仲間のクラゲを、いとも平気で飲み込んでしまうという。その生命の設計図、即ち「DNA」を、リチャード・ドーキンスは「利己的な遺伝子」と呼ぶ。以来生物は「食うか食われるか」の地獄道を駆け上つてきた。植物も根から毒素を分泌して周りの植物を枯らし、あるいは弱らせ自分だけが光や栄養分を独占し、生き残ればよいとする現象が見られる。

動物も、栄養確保のための争奪戦は、時に残酷を極める。昆虫や魚など、姿や色をかえ、敵を欺き、身を隠したり、或いは素早く攻撃に転じる。草食獣は情報収集能力を高め、早く逃げるための足を進化させた。反芻獣は敵のいない間に草を第一胃に詰め込み、安全な所に退避して、ゆっくり反芻する。反芻獣は胃袋が四個あつても、普通の動物の胃に相当するのは第四胃のみである。

肉食獣は瞬発力を高め、爪・牙など攻撃武器を進化させた。身軽になるため、腸の長さも縮めた。

我が家のシェルティは犬のいる家の近くに来ると、素早くシツポを立て、おれはデカインダぞ！

と自己主張をする。更に電柱があれば、脚が短くせに、より高い所にオシツコをひっかけ、臭いがより遠くまで飛散するよう、懸命の努力である。選挙が近くなると、街角の電信柱に顔写真を張り、顔を売り出す議員候補と、我が家の犬は張り合うつもり？ 縄張り主張は全ての動物に共通らしい。

*

【狼の吠え声… 犬共よ！ お前達の先祖は我ら誇り高き狼なのに、忘れてしまったのか？ ろくでなしの人間などになぜついて行つた？ 人に飼われ、シツポを振り、腑抜けの家来になり下がつて……。奴隷の身を、恥と思わないのか？ 日本で我らを滅ぼしたのは彼奴らだぞ。外国のジステーパーや狂犬病の犬などを輸入し、それを我等にうつしたのだ。北海道では明治政府の気違い共が、懸賞金をかけて俺たちを殺した。そのせいで今、知床にエゾシカが増え過ぎ慌てふためいている。人間の愚かさの標本だ。それにつけても昔の人は偉かった。農耕民族の最大の敵は鹿や猪だ。それを退治してくれる俺たちを「良いけもの」即ち「狼」と名付けた。狼を守り本尊とする神社もある。そしてイソツプの童話など糞くらえだ。我らを悪魔扱いしている。人間のご都合主義だ。犬共よ、お前はそんな悪党に、なぜシツポを振る？

人間の不見識により、お前達は姿・形をメッチャ変えられた。オモチャにされ、野生の本能は、そぎ落とされてしまった。嗅覚も低下した。独善だらけの「人」とやらの思いのまま、一体お前達は幸せなのか？ 反撃してやれ！ 噛みついてやれ！ チット脳味噌を膨らましたぐらいで、何が「万物の霊長」だ？ 森羅万象に君臨したつもりで、威張りくさっているあの輩の鼻をあかして

やれ。あんな極悪非道の化け物は他にいないぞ！ 多くの動物や植物を根絶やしにして、環境破壊でメチャクチャ。そのうち自分達の子孫さえ残せなくなる超愚か者だぞ！ 主を選ぶならもつとよく見て選べ！ 人のやっている事はケンカばかり。ケンカの道具作りに明け暮れて、偉大な文明を築いたとか寝言を言つてる。低能この上ない最低の動物なんだぞ！ そんな奴は、見限つてヤツらの鼻をへし折つてやれ！ そしてお前達は、さつさと俺達の所へ戻つて来い。俺達の遠吠えの真の意味がわからんのか。耳を澄ましてよく聞け！ お前達の遺伝子は、別れた時と殆ど変つていない。俺たちと恋の歌を思いっきり唄え。俺たちとかわいい子供もしっかり造ろうじやないか。恐れるな。けりをつける！ さつさと帰つて来い！】

*

動物の騙し合いも見事なもの。地上営巣する鳥類の「利他行為」で、自分が傷つき、飛べないふりをして、敵狐などを巣から遠くへはぐらかし、子を守る「擬傷行為」は、見事な進化の極致とも言える。かと思えば、郭公のように、他の小鳥の巣に卵を産みつけ、他人に我が子を育てさせる「托卵」現象。こんな狡猾な行為も、生命史の1ページである。勿論、生物には「共生」という見事な関係もみられる。ヤドカリとイソギンチャク。マメ科植物と根粒菌など。

さて人類は、幾多の進化を重ねて、やつと今日的高等生物まで進化したというのに、「共食い」にも似た凶暴性を捨てきれずに、いまだに進化の道のりを歩み続けている。霊長類が属する系統樹のてっぺんまで登りつめ、つい最近枝別れたオランウータンとゴリラは、あんなにも気心の優しい

動物なのに、最後まで登りつめた人類とチンパンジーは、仲間同士が殺し合いをする真に愚かな生物に進化してしまった。同じ進化の道筋を歩んできたのに、どうしてこんなに大きな変化を生じたのか？ 尤も同じ兄弟でも、兄は仏様のように温厚な人なのに、どうして同じ腹から生まれた弟は、殺人などを起こすひねくれ者に育ったんだらう… というような事例も見られるから、先祖の中には、仏陀もいれば夜叉もいたという事であろう。思わぬ隔世遺伝（先祖がえり）が突如として現れる…と考へれば、このたびISの凶暴性も、どうにか納得のいく話ではある。隔世遺伝は、副乳・多毛症・六本指など肉体的なもののほか、良くは分からないが、精神的なものも存在するようである。

＊

人類は、大変大脳を進化させ、徳を身につけ、神様の課長補佐を自任しても良いような、特別の存在であるかのように取り扱われてきた。野獣のような一般の動物とは数段異なり、高度の精神活動をを行い、相互扶助の精神で集団生活をする。探究心も強く、文学・科学などを高度に発展させ、偉大な文明も構築した。その原動力は、互いに助け合い、強い絆で結ばれ、利他行動を積極的に遂行する模範的生物として、この惑星のリーダーを任され、君臨してきたと考える事もできる。

なのに今日の実情はどうか？

人類の歴史を振り返ってみれば、戦争のなかった時代など、見つけ出すのに苦労する。なぜに、これほどまで、殺し合うのか？ 目に余る残忍性がいっつの世にも歴然と目立つ。

家庭内暴力や弱い者いじめから、小規模の近隣同士の争い。更に国同士の真つ向対立。そして全

世界が真つ二つに割れた世界大戦。こんな所を見ると、どんな宗教でも唱えている博愛の精神など、いずこにも見当たらない。博愛精神の伝導に命をささげた聖人から見れば、私の言う事などグスの下。人間とはそんな卑劣なものではない。もつと高貴な神に近い存在であると言われるかもしれない。しかし現実には今日見られる、わが国さえよければそれでよい。オレさえよければ…。短い一生なのだから今、俺が楽しければそれで良い。言われてみれば、そうではないと簡単に反撃はできないが、もう少し相互扶助の精神で、仲良くできないものかと、常日頃案じている。

＊

孟子の「性善説」。人間の本性は、「善」であり、仁・義を先天的に具有する…と。なるほど尤もらしく聞こえるが、果たしてこの世はそんな風に感じられますか？ そんなもので世の中が充ち溢れていると感じますか？ 私にはそれは理想主義者の戯言（ざれごと）としか耳に入らない。性善説が人間の本性なら、世界の各地で、何でこんなに争いが多いのか？

ならば、世の中は荀子の唱える「性悪説」で万事説明できるのか？ 残念ながら私はこの方が正解に近いと思う。民主国家がどんなに憲法で職業の自由とか最低限度の生活を保障し、教育の機会均等を述べようが、現実社会は所得の格差や、社会的地位が明確に分断され、低位にある者がいかに背伸びしようとも、上位の者の足元にも及ばない。ほんの一握りの者が豊かさの大半を握りしめ、一般人は辛うじてその日暮らしにあえいでいるのが現実である。このたびのISによる反乱の遠因は、その辺にあるのではなからうか。真に常軌を

逸してはいるが、もつと公平に富の分配を配慮しなければ、永遠にこの反乱は繰り返される。

＊

さて「テロリズム」というキーワードを辞書・百科辞典・インターネット・新聞解説などから検索すると、定義は百を超え、簡単には説明できない…と書いてある。語源としては1789～99年のフランス革命での恐怖政治（フランス語の Terreur）に由来するという。王政転覆・共和制樹立はのち、世界を大きく変えた。

テロリズムは一般的には、政治的なもので、同一の集団が、支持者からは「自由の戦士」、敵対する者からは「テロリスト」と呼ばれる場合が多いという。しかし、国権を握る者が、政治的に対抗する者を非合法化し、更に国家が敵対者への武力行使を合法化するのが通例で、後にノーベル平和賞の南アフリカのマンデラ・ネルソンは、テロリストと呼ばれ逮捕・投獄された。インド独立の父マハトマ・ガンデーの非暴力・不服従運動でさえ、イギリス政府はテロリズムと位置付けた。

わが国でも、平安前期の坂上田村麻呂は、文の菅原道真・武の坂上田村麻呂と言われ、文武の双壁として尊敬を得たが、それは戦に勝った政権側の言い分で、平穩に暮らしていた陸奥の人々にとって、田村麻呂は単なる侵略者に過ぎない。田村麻呂は大将軍だか清水寺創建者だか知らないが、渡来人「阿知使主」の子孫であり、阿弓流為（あてりじの陸奥王国を滅ぼした平安朝の暴挙であることとは、歴史上の事実である。平安後期の八幡太郎義家も同じこと。前九年の役・後三年の役とも、平穩な陸奥を破壊したテロリストである。テロリズムの定義は真に自己中心的で、普遍性

を持たず、妥当性に欠ける。例えばアメリカ政府は自国の権益を擁護するために、CIAがキューバのカストロ政権打倒計画を実行したのは、キューバ側から見れば明らかなテロリズムである。

大量破壊兵器を隠し持っているとしてブッシュ政権はイラク攻撃を展開したが、結果的には大量破壊兵器は存在しなかった。イラク国民からしたら、莫大な数の国民が殺害されたのだから、アメリカ軍は明らかなテロ集団であり、歴史の最大級の汚点とも言われる。

*

一方フランス革命に優るテロリズムはなからう。フランス革命は、世界史における市民革命の代表的なもので、1787年、王政に対する貴族の反抗に始まり、89年、全社会層を巻き込み、本格的革命となる。絶対王政（ブルボン朝政府・ルイ16世）を倒し（ギロチンの嵐）、共和制へと展開。周囲の諸国との間にも、革命戦争が激化し、ジャコバン派独裁化により「恐怖政治」が出現する。革命は収まり、1799年、ナポレオンによる帝政樹立へと移行する。

恐怖政治は1793年4月〜94年6月の間は、パリの革命裁判所により1251人の処刑が行われ、同6月11日から7月27日のわずか47日間には、なんと裁判所による審理は行われず、略式判決で、パリの断頭台は、1376人もの命を露と化した。このテロリズム断行の主役はロベスピエール弁護士で、ジャコバンクラブ・山岳派領袖である。彼の歴史に残る言葉に「徳なき恐怖は有害であり、恐怖なき徳は無力である」とある。

フランス革命が掲げた「自由・平等・友愛」の近代市民主義の諸原理は、その後、世界に広まり、

民主主義の土台となった。

*

【恐怖政治】…これは権力者が自らに反対する者を投獄・殺戮などする暴力的弾圧であり、暗黒政治へとつながる。代表的なものはロベスピエールによる前述フランス革命である。独裁政治や非民主的政治はしばしば恐怖政治に陥る。

例えば第二次世界大戦におけるソヴェイエトのヨシフ・スターリンによる大粛清。密告主義により数百万人を粛清したといわれる。飢えた農民が、落ち穂を拾ったら、国有財産窃盗の罪で即銃殺とは、あまりにも酷い話。イタリアのベニート・ムッソリーニはファシスト独裁体制を樹立。エチオピアを併合。統帥権で独裁政治を行った。ドイツのアドルフ・ヒットラーはゲシュタポ（反ナチスを取り締まるための秘密警察）を用い、アリア民族を中心に据えた人種主義と、反ユダヤ主義の政治活動により、ホロコーストでユダヤ人600万人を大量殺戮。その他を含めると千百万人を虐殺したという。そして東條英機は憲兵を用いて人々を監視・恫喝・投獄等を行った。いずれも官憲・公安警察・秘密警察などを駆使し、逮捕・収監し、人々に分らないうちに殺してしまふ。更に無実の人々を、陰謀を企んだとして弾圧する。

*

こんな恐怖政治を平気で行う人物とは、一体、どんな大脳構造をしているのだろうか。何か共通した病理学的欠陥を有しているに相違ない。

テロリズムの怖さ。アメリカの同時多発テロ。何の罪もない人々を一瞬にして多数犠牲にした。これが人間の本性に関係しているとすれば、永遠にこの世からなくならない。悪夢は繰り返される。

社会を根本的に変えなければ同じ事を繰り返す。もし人類に智慧というものがあんならば、いい加減この辺で恒久的な対応策が考え出されてもよさそうなものだ。物質文明の急進はもう良い。人類は精神的にもっと穏やかで、恒久的平和の基礎固めに邁進することを切に願う。

ギター文化館

2015 CONCERT SERIES

- 4月 5日 (日) 大萩康一&小沼ようすけ
- 5月 3日 (日) ギター文化館所蔵名器コンサート
- 5月23日 (土) マリオ鈴木ギターリサイタル
- 5月24日 (日) 長谷川きよしコンサート
- 5月30日 (土) 國松竜次ギターリサイタル
- 6月14日 (日) 高橋竹董津軽三味線コンサート
- 7月 5日 (日) 莊村清志ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35

Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

春を迎えて、足は軽い。暖かい大気を胸いっぱい吸った。心は弾む。今年も元気で生きていきたい。気になる事は多少あるけれど生身の体だ、何かあってもその時はその時、と春の嵐に疫病神を投げ込んでいい気持ちになっていた。

そんな時、病、老の苦の後、人一生の終りに死の苦を越えるにも様々の形のある事を聞かされた。どろどろした現実の話だ。

高齢の姉弟が、お金の心配もなく暮らしていたが、八時以降に安くなる隣町の店まで、夕食を求めて行くのが日常だったそうだ。その間に姉さんが亡くなった。都会で働いていた元気な日は忘れられ、二人共何を考えて生きていたのだろうかという状態になってしまったという。

片付ける事は出来なくなったのか、幾つかある部屋は塵で一杯になり、最後は台所の水道近くで寝起きしていたようだ。買物の釣銭があちこちに散らばっていたとか。その後弟さんはどうしただろう。

男親と独り者の息子さんが、仕事に行っている間に男親は倒れていたという。食事は父、息子いつも一緒だったという。布団は敷いたまま、女手の加わらない中でも二人で頑張っていたのだろう。陽だまりの光を遮って、冷たい空気の溜まった中で息絶えていたのだろう。夫婦で話したり笑い合った日から遠く時間が過ぎてしまったと急いで奥さんの許へ行ったのだろう。今頃は合えた事だろうか。

同じ屋敷内に若夫婦家族は現代風の住居、七十年代に入った親夫婦は大きな母屋に住み、二人は共

同してやる仕事も、会話もなくなったのか、愛も消えつつあったのか、別々に食べ、別の部屋で寝起きし、妻が冷たくなっていったのも分からなかったという。あまりに淋しい最後ではないだろうか。時々若い人の訪れや、見回りの心遣いも欲しいものだ。

そして先日友の死はショックだった。十日前に合っているいろと話したばかりだったのに、人はそんなに弱いものだろうか。屋敷内に若夫婦の家族もいる。息子さんは朝夕声をかけてくれたそうだ。買物もしてくれたといっていた。なのに何故、死の前に気がつかなかったのだろうかと思ってしまう。

孫の面倒を見、ついこの間まで送り迎えしていたが、大きくなった孫は寄って来なくなったのだろう。衰弱死という話もあるが、食べていなかったのかな…とふうと思ったりした。白雲荘の集まりに行きたいという気持ちになってきていたのにと返す返す残念だった。

どの死をみても、私だつて成り兼ねない共通点が沢山ある。体に変調がきている事も自覚せざるを得ない今。それからくる体力、精神力も時に低下してきている事を感じるこの頃だ。若い時は家族があった。夫婦で子供のために一生懸命だった筈だ。人生経験を積む中で父母に、祖父母に、親戚の人に、地域の人達と心を通わせていた筈だ。力があつてよく動けたし、仕事をする事で経済的にも恵まれていただろうに。老いと共に、何故ひとつひとつがなくなっていくのだろうか。望んでも願っても、若い日は二度と戻っては来ないのだ。

何もしたくなくなるという事は少し分かるよう

な気がする。

家があつてもそこに人はいない。家族がないのだ。人はいても話をしない。他人と拘りがなくなっていく時に、自分の存在もなくなっていく。

人という字は支え合つて出来ていると聞いたが、支えがなくなれば張り合いがなくなる。

現金を得ることがなくなつて、買う物も少なくなる。最後に食べ物まで欲しくなくなるのか、調理しようという気も薄らいでいく。

手足を洗うことすまし、風呂に入らなくなり、場、顔も洗うことを忘れ、髪解くこともなくなっていく。

布団の上げ下ろしも力が入らずなくなる。家の周りの片付けは言うまでも無く、塵を纏めることもしなくなる。

人に合うことも避けていく、結局外に出るのが厭になつていく。買物も億劫になる。テレビやビデオとの世界に安らぎを求めていく。

寝ていることが一番楽になつていく。その儘、体は活動をしなくなる。

でも、そんな事に甘えてしまつては大変だ。かといつて一人ぼっちでは強い気持ちは持てるかな。否もてないよ。

市議会を傍聴した時の事、ある議員さんが福祉関係の質問をした後「淋しい老人、孤独な老人が一杯います。その一人一人は話しをしたがつていません。決まりの枠の中で考えて押し付けたりせず、温かい言葉かけの出来る福祉行政をお願いします。私達の人生の、先輩の方々です」と言った。その心をお役所の人達は確り受け止めて欲しいものだ。

「形ある物はすべて壊れる」と、すべての物が

いつも同じ状態では存在できないのです。人間も変りなくいつかは弱くなつていくのです。若い方達にそのことを知って頂いて甘えさせて頂きたいのです。同じ敷地内にいる方に、朝夕声をかけてあげてください。離れている方には電話してあげてください。「年寄笑うな行く道じや」と申します。私たちが年寄も努力していきましょう。生きてきた人生の誇りは捨てずに、同年代と力を合わせて現代に生きる勉強や、若い人と憶せず交流していきましょう。

死の寸前まで生きていかねばならないのですから「生」の苦を越えて行く毎日を努力して過ごしましょう。

先ず、布団の中で体を動かし起さる準備体操です。口では「きょうよう」「きょういく」を言い、一日の予定は頭で考えます。「今日の用事は」雨戸開け、カーテン開けから始まって一日の予定を考えるのです。

次に「今日行くところは」畑に野菜とり、買物、公民館へ、そして誰かに合える事を期待しましょう。無理のない時間で実行しましょう。

夜は「やったね」と自分を誉めて眠りにつきましょう。力を出して、心を開いて「生」の苦を越える努力を、毎日続けていきましょう。自分自身が越えていかなければならない事です。

「今日の用事は何かあるかな」

「今日は何処へ行くのかな」

と自分自身に言い聞かせましょう。そして毎日毎日続けていきましょう。この原稿も「今日は図書館に行って、仕上げるぞ」と決め、やっと出来上がって心は躍っています。

地域に眠る埋もれた歴史(1) 木村 進

数年前より住んでいる(石岡)地域や用事があって出かけた途中の道にあるお寺やお堂などを見つけると、その写真を撮り、後から調べ、またもう一度その周辺も見回り、過去の地形や住んでいた人びとの暮らしなどを想像しながら過去の歴史をたどることをライフワークの一つとして続けて、毎日記事を一件づつブログに書き続けてきました。

地域に眠ってしまったっている歴史を掘り起こしてみると、そこに眠っていた過去の出来事や今の人びとに忘れられた事柄が私に語りかけてきます。

そしてこれかを眠らせておいてはいけなさと毎日欠かさずブログに書き続け、すでに1900回ほど続いています。

今までの記事をまとめてここに連載として紹介させて戴きたいと思えます。

かすみがうら市出島地区(1)

この出島というのは、霞ヶ浦の西側で石岡入りと土浦入りに挟まれた地区で、霞ヶ浦に飛び出ている場所から出島と名付けられました。現在は千代田町と合併して「かすみがうら市」となっています。霞ヶ浦に飛び出した地区ですので、霞ヶ浦の魚の養殖やレンコン栽培が盛んなところです。

○歩崎公園

3月中旬のある日、家の近郊では、春が比較的早くやってくるような気がして行ってみたいくなりました。

霞ヶ浦の湖に近い道を車で走って見ると、あちこちに梅もほころんでいました。そして出島の先端にある歩崎公園にやってきました。平日のせいも、また日暮れに近かったせいも、公園も、この突端の道路にも誰もいません。いつもなら釣り人は結構いるのですがこの日はもう家に戻ってしまったのかもしれない。

人があまりいかな公園の外れ(水族館の裏手の空地)には、昔使われたと思われる木の舟が置かれていました。沖合に鯉の養殖生け簀が見えます。手前にはたくさん水鳥が波に揺られて楽しんでるようです。

○歩崎観音

歩崎の地名の由来となったのが公園の裏手の高台に建つ「歩崎観音」です。正式には「宝性院歩崎山長禅寺」といい、聖武天皇の時代(724~749年)に行基菩薩が彫ったと伝えられる十一面観音が祀られています。

しかし、この観音様のご開帳は過去数百年に亘って33年に1度しか行われてきませんでした。昭和23年、昭和56年、に行われ、次回が2014年ということでしたが2012年から毎年8月16日におこなわれる「あゆみ祭り」に合わせて、開帳されることになりました。公園側からみると、崖の上に立っており、ここには霞ヶ浦を一望できる展望台が作られています。展望台からの眺めは素晴らしく、茨城百景に選定されています。

寺への上り口はこの展望台の左右に参道口が2本と、その真中に展望台に真っ直ぐに登る石段があり3本あります。今は真中の石段以外はあまり通る人が少なくなっているようです。東参道口右

側)は比較的なだらかな石段で今でも登ることができるですが、西側は急であり使われていないようです。

公園が出来る前は、この参道入口近くまで霞ヶ浦の湖岸が来ており、岸边に下りるようなイメージだったように思います。

真中にある展望台への上り口は真つ直ぐ登るので少し急で、左右の壁を切り落として階段をつけたようです。上に登ったところにある展望台はさえないものが無く、かなり広範囲に見渡せます。東向きですから日の出は良く拝むことができそうです。今年の元旦に訪れましたが、雲がかかって初日の出は拝みませんでした。

右側は土浦・阿見・美浦方面が眺められ、右下には「かすみがうら水族館」が見下ろせます。

この沖合を霞ヶ浦が土浦入りと高浜(石岡)入りの二つに分かれる地点で三又と呼ばれており、風の強い日などには多くの舟が遭難した流れが速い場所です。左側は行方市がありますが、現在はこの出島から大橋で結ばれています。

昔は有料な橋でしたが現在は無料です。橋を渡った行方市には水の公園「霞ヶ浦ふれあいランド」や道の駅などがあります。

展望台の入口にはこの地で撮影された映画「米」(1957年今井正監督)の撮影記念碑が立っています。近くのお城の形をしたかすみがうら市の郷土資料館にも映画「米」に関する資料が置かれています。映画で描かれているようにこの地の農魚村(半農半魚)も貧しい生活をしていたのででしょうか。記念碑の裏には「青い湖のほとり」ここに芽ばえた米の一生とそれをめぐる人々の哀歓を描き上げたこの映画は 昨年の四月から一ヶ年にわたる 育く

むもの、愛と汗の豊かな稔りでもあった」と手書きの文面が彫られています。その米の記念碑の隣りに立っている「折本良平頌徳碑」があります。

折本さんは、それまで地引網に頼っていた漁を明治13年に「帆引き船」漁法を考案した人です。動力を使ったトロール漁法に切り替わる今から50年程前まで、この霞ヶ浦の名物とまで言われた美しい帆を張った舟がたくさん浮かんでいたのです。今では観光帆引き船が時々就航して観光客を楽しませています。

では歩崎観音におまいりしていきましょう。入口に大きな仁王門がおかれ、左右には大きな一対の仁王像が置かれています。この仁王様も興味深い話が伝わっています。

江戸時代に日光東照宮を建築するために多くの名匠が集められていたそうです。その工事には30年もの年月を費やしており、この日光の仕事が終わった後に関東各地にこの名匠たちが散って行ったようです。

その中の1人がこの地で仁王像を彫って納めたといわれているようです。(記録では1534年)山門(仁王門)から奥の本堂を見ると本堂もかなり重厚な趣を感じます。

正面に本堂があり、右側が寺の管理をしている真如苑の茨城本部があります。こちらの建物は対岸にあった長泉寺より移築したそうです。

この寺も古くからの歴史のある寺でしたが、檀家がいなかったため戦後には荒廃が進んでしまい、昭和23年に真如苑にお願いして管理していただいているものだと思います。

この本堂の拝殿上には龍の彫り物があります。また、この本堂は戦時中の爆弾投下によって後ろ

側に少し傾いてしまったそうです。それを2本の丸太で支えています。

本堂横には鐘楼があり、山門の先には先に書いた展望台があります。昔は海を眺めるように山門が建っていたのでしょうか。

この歩崎観音もかなり面白いです。調べると色々なことがあるようですがあまりか書かれたものがないようです。いろいろ興味がわくのですが、まず一つはご本尊である「十一面観音像」です。行基菩薩が彫った像を旅の僧がこの地に堂宇を建てて安置したといわれるものです。

もう一つは「黄金で造った機織機」です。1182〜3年頃、童女がお産に苦しんでおりました。その時この観音様に願掛けします。「このお産が無事にできれば黄金で機織り機を造って奉納いたします。どうか無事に子供が生まれますように！」と。願い通り安産となった童女は約束通り、金の機織り機を奉納したといわれています。

もう一つ見たいものがあります。それは石岡の三村地区の上の高台に「正月平」という土地があり、ここに伝わる話です。この目出度い土地の名前の由来は、源義家親子が前九年の役で、奥州に向かう途中でこの地で正月を迎えました。数軒しかなかつたこの地の住民は総出で、乏しい貯えの中から赤飯を炊いて正月のおもてなしをしたそうです。そして源義家(八幡太郎)と父の頼義は、それに大いに感激しました。

このことは「休馬美落集」という巻物の中で、義家は村人に対し心より感謝の気持ちを表しているようですがこの巻物は私は見たことがありません。

さて、この時に源義家親子は、この地に「黄金

のはたし」を残したといわれています。この黄金のはたしは江戸時代まで地元(正月平)にあったが、歩崎観音に奉納され、これも³³年に1度しか見ることができなくなつたのです。

この「はたし」とはどんなものかまつたくわかりません。旗でしょうか。でもこれはきつと「黄金の機織機」と同一のものではないかと思ひます。私が古東海道を追いかけ、常陸国府である石岡には美浦村から霞ヶ浦を渡つてこの出島地区を通り、またこの三村地区から中津川へ渡つていたと確信した一つの表れでもあります。しかし、何処にも書かれているものはありません。地元には伝わっている僅かな痕跡もわかつた時に少しづつ何処かに書いたものを残せば、それを見てまた調べたりする人も出てくるかもしれません。

歩崎観音のすぐ裏手にお墓のような石碑がいくつかあり、その一番左側に「海量法師」と書かれているものがあります。この名前を調べてみました。

海量法師は江戸時代後期の僧・歌人で、1733年に近江国犬上郡の浄土真宗の寺に生まれ、後に江戸に出て歌人となり、近江の彦根藩主井伊直中に招かれて、藩校などを建て彦根藩の教育に尽力した人物だそうですが、後に全国の諸国を回つたといひます。

この歩崎観音には何時来たのかよくわかりません。しかし、この寺の住職をして数々の奇跡などを示したと言われている、この地で不慮の死を遂げたといわれています。

このあたりは、何処までが真実かは知る由もないのですが、考えると興味は尽きません。

この海量法師がいなくなつてから、この寺は無

住になり荒廃が進んでしまつたのだそうです。調べた中に海量法師が四国石鎚山で詠んだ歌を見つけました。

遠遊 千里 天涯を 度る

南予の 山川 行路 斜めなり

独り 石鎚の 山色を起こす 有り

暮春 三月 雪花の 如し

3月に石鎚山も雪が積もつています。私も若いころに鎖場などを伝つて登つたこともあるのですが、季節は夏でしたので冬のこの山は知りません。北参道(あまり使われていない)側には「豚霊之碑」と書かれた大きな石碑があります。このあたりに養豚がさかんというような感じはしませんが、何かあるのでしょうか。

少し調べて見たのだけけどわかりませんでした。展望台のすぐ横には「金毘羅神社」があります。

海の守り神である金毘羅さんをお祀りしているのでしょうか。何時頃建てられたものかは不明ですが、かなり古くからあるようで、海(霞ヶ浦)の安全を願つて漁される方などが参拝をされるそうです。

さて、歩崎の名前ですが、今から900年ほど前のこと、この沖合を航行する船が嵐で沈みそうになりました。その時に「観世音菩薩様」と唱えらると、観音様が現れて海を歩いて船までやつてきて、岸辺に導いてくれたといひます。このためこの観音様を歩崎観音と言うようになったといひます。

この話が本当かうそかなどは何の問題もありません。このような話にはその時代の歴史的な思いが伝わってきます。それを大切に伝えていくことに意義があるのだと思ひます。

○田伏城と実伝寺

旧出島村と行方市を結ぶ霞ヶ浦大橋の近くに実伝寺という曹洞宗のお寺がありました。この寺の場所が少し気になつて立ち寄りました。

お寺としては特にこれといった特徴もないように見えます。しかし、置かれている位置が少し気になつたのです。

この場所は近くに霞ヶ浦名産の佃煮などの加工場もあり養殖の陸いけすもある低地です。

寺の入り口横に小山がありその麓に紅梅がきれいに咲いていました。この小山の入口に鳥居があり、頂上には神社でもあるのでしょうか。こんもりとした山なのでまるで古墳のような感じがしますが、何も書かれた物はありません。ネットで調べて見るとどうやら「青祖神社」と呼ばれているようです。

お寺の横の梅の古木はまだほとんど咲いていませんでした。お寺は特にこれといった特徴があるものではありません。少し古びた山門と奥に本堂があるだけです。しかし、調べて見るとこのお寺の裏山(今は麓からお墓が延びています)が、かつて小田氏の部下の「田伏氏」の居城があつたそうです。田伏氏は土浦の小田氏が佐竹氏に滅ぼされた時に滅亡しました。

この実伝寺の名前も田伏城の城主「田伏次郎大夫藤原実伝」という人物がこの寺を建立したのでつけられたようです。この藤原実伝は1396年に没したそうだから、この寺はその前からあるのでしょうか。

土浦の小田氏が滅んだのは1590年頃なので、その前後にこの城も滅んだものと思われまふ。城は滅んでも寺は残るんですね。

(石岡) 府中城の城主の弟の居城「三村城」の常春(つねはる)が建てた常春(じょうしゅん)寺はその麓に残っているのと同じです。

参道の中間に建つ山門の入口に「不許葷酒界内」と書かれた結界石が置かれています。

これは禅寺によくあるもので、ここから先はニンニクなどの臭いにおいや酒臭い人はこの山門から入ってはいけないという意味で結界石と呼ばれています。

この石柱が建てられた年月が裏側に彫られていて嘉永元年となっていますので1848年です。ネットで検索していたらこのお寺の場所に「実伝寺貝塚」と言うのが載っていました。貝塚があった少し盛り上がった台地にお寺を建てたのかもありません。

(記事は2012年3月に書いたものです)

県指定文化財

兼平智恵子

豊かな自然と豊かな湖の恵みをうけて古代から栄えた石岡には、豊かな恵みをうけて先人達が生み出した多くの文化遺産が残されています。その大切な文化遺産を現代の私達は未来へ引き継いでいかなければなりません。

指定制度に基づいて保存されている文化財を、当会報一〇五号に国指定文化財(日本国政府、文部科学大臣が指定する)七件を紹介しました。

今回は県指定文化財(茨城県教育委員会、教育長が指定する)をご紹介します。当会報一〇五号にて紹介しました石岡の県指定文化財を三七件と記しました

が、市指定文化財とされてきた税所文書(古文書)が茨城県として重要で価値の高いものとして認め、今年の平成二十七年一月二二日付け県指定文化財(市指定文化財との重複はできない)となり三十八件(旧石岡地区二十件、八郷地区十八件)となりました。主に旧石岡地区を中心にご紹介していきます。

○税所(さいしょ)文書 有形(古文書)

指定 平二七・一・二二一

税所とは平安・鎌倉時代の在庁の一つで国衙にあって、その国の正税、官物の収納を司る官職であった。後にこの職は世襲されこの地方有数の豪族(府中六名家)となっていた。この文書は、税所家に伝えられた文書を三帖に表装した内の第一帖で、第一帖所収文書には、在庁官人税所氏の公私にわたる活動、中世における国衙機能の存続、或いは税所氏の領地形態を伝える資料が含まれている。特に貴重なのが常陸国衙によって作成されたとされる弘安二年(一二七九)の、「作田惣勘文」で中世村落史研究にとって大変貴重な資料となっている。

是非、税所氏の活躍の内容に触れて見たいと胸がワクワクします。文書は茨城県歴史館お預かりとなっているそうです。

ちなみに税所氏の菩提寺は茨城一丁目の萬福寺となっています。税所氏の墓地と称される五輪塔数基が石岡市の行く末を案じているかのようです。

○石岡の陣屋門 有形(建造物)

指定 昭四三・九・二六

元禄一三年(一七〇〇)常陸府中藩主松平頼隆(永戸黄門の弟)を祖とし、九代目松平頼繩(よりつな)の

時代、文政十一年(一八二八)、火災に遭って焼失した江戸小石川の藩邸が再建された際の余材を府中石岡の陣屋に搬入し、建築されました。

石岡の皆さんはすでにご存じかと思いますがほぼ元の位置に戻り改修された陣屋門は門戸を開いて皆さんのお越しをお待ちしているかのようです。石岡市民会館が昭和四三年に完成した後、陣屋門は石岡小学校の敷地内に移され役目は果たせず佇んでいました。年季を重ねた市民会館とマッチして雄々しく立ち誇っています。

○扁額三十六歌仙絵一四 有形(絵画)

指定 昭五八・三・一八

室町時代、文龜二年(一五〇二)に常陸小川の城主蘭部時定以下一族によって奉納されたもので絵師 成田小次郎氏の作である。十四面の着色板絵で額装され、紀貫之、僧正遍照、小野小町の姿がそれぞれの詠じた歌とともに優雅に描かれている。室町時代の在銘歌仙絵は全国的に遺品が少なく中世絵画の作例として貴重な文化財である。

この歌仙絵は常陸國總社宮に保存され、例年行われている「いしおか雛巡り」の際、常陸國總社宮 社宝公開で拝見出来る時があります。奉納された蘭部時定一族に係る伝説が伝わっています。

「鈴ヶ池片目の魚」

天正一八年(一五九〇)府中城は佐竹義宣の攻略に依り落城した。大掾氏二十四代城主清幹は、十八歳の美丈夫であった。そして奥方の鈴姫は、蘭部城主河内守の息女にて、近郷まれなる美貌の持主で、その瞳は鈴のように美しい十六歳であった。似合いの二人と祝福されたのもつかの間、鈴姫の

父菌部の軍兵が佐竹の先手となって、府中城深く攻め入ったのである。裏切られた清幹は「おのれ鈴姫、今を限り妻でなし、思いしれ」と、手にした刀で姫の片目を突き刺して燃え盛る炎の中に身を投じたのであった。片目となった鈴姫は、生きる望みも失い数々の恨みをのんで、城中の池に身を投げたのである。鈴姫の重なる恨みがこもったのか、それ以来、この池に住む魚は皆、片目であると言われている。そしてこの池を誰いうとなく「鈴ヶ池」と呼ぶようになったのである。

この鈴ヶ池のお話しは歌仙絵奉納があつてから八十年余り後の出来事、更に四百年余り後の現在、鈴ヶ池は昭和初期に写された写真でしか見ることができません。

次回もエピソード等添えて県指定文化財をご紹介します。次回は昭和初期に写された写真でしか見ることができません。

(参考資料 石岡市の文化財・石岡の歴史と文化)

・うなじ震わせ寄り添うパンジー
・背すじ伸ばして水仙見詰める応援団パンジー

(智恵子)

国王神社・胴塚

小林幸枝

茨城県坂東市は、平将門を祀る聖地として、将門に纏わるエピソードや旧跡が沢山残されており、日本のホラースポットを紹介する本などにも沢山紹介されています。

国王神社には将門が祭神として祀られており、木彫の神像があります。将門を祀る社は全国にた

くさんありますが、国王神社は唯一将門を祭神としている神社です。

本殿は何時も開放されており、参拝が可能です。東京では将門を怨霊神として信仰されている所もありますが、坂東市では郷土の英雄として崇められています。

将門の三女が彫ったとされている将門座像は強烈な怒りを表した表情で、文化財にも指定されておりです。この像は、秘蔵の為、市の展覧会などでしか見学することは出来ません。

将門は、国王神社に近い猿島さしまで平貞盛、藤原秀郷がひきいる朝廷軍に討たれ、その首は京都に運ばれ、さらし首になった。

首を討たれた将門の胴は、坂東市の神田山(かだやま)に埋葬されたといわれています。神田の由来は、この地が神領であったことからそう呼ばれるようになったといえます。

神田山は桜の名所としても知られており、延命院の奥には将門の胴塚が建てられています。胴塚の背後にはカヤの巨木があり、このカヤの木は将門の霊力を吸い取って大きく成長したとも言われています。

胴塚を囲むように六体の地藏と観音像の七体の供養仏がありますが、これは北斗七星を信仰していた将門を慰めるために祀られたとも言われています。

毎年、十一月には将門軍を再現した「将門まつり」が行われています。

【風の談話室】

今年も厳冬だといわれ、北の各地では豪雪に見舞われ大きな被害がもたらされた。当然、春の訪れは遅くなるものと思っていたら、例年よりも早い桜の開花となった。遅咲きのはずの我が家の梅の花も早々に咲きはじめ、梅の散るのを待つて次々に咲いてくる花々は、梅の散るのを待たず次々と開花し、賑やか過ぎる春となった。今月の談話室も、この春に負けじと話しが弾んで、嬉しい春の音になった。

《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

生きて行く力

田島早苗

太古の昔から自然と共にのびのびと生きてきた人々は、文明の利器が開発されて便利になって行くのに反比例して、心の自由を奪われていった。遺跡の発掘で出土した品々の

中に、争いの痕跡を見つけ、心が冷え込んでしまふことも多い。原子を捉え、宇宙旅行も夢でなくなりつつある現代でも、人間の闘争心は、飽くことを知らず益々エスカレート、更に悪質になっていくようだ。

豊かな心を育むはずの宗教が、人の命を平気で奪うテロの集団と化し、何の関係もない人を巻き込んで世界を恐怖のどん底に陥れてしまう。

イスラム教を信じる若者が、チュニジアで起こした無差別テロは、主に外国の旅行者を標的にしている、日本人も三名が命を奪われてしまった。自分では防ぎようも無い災難に見舞われた人を運が悪かったでは済まされない。テロに走った若者

の心の闇を解明して対策を取らない限り、今後も事件の発生を防ぐすべはないだろう。

日本で、世界を震撼させた地下鉄サリン事件発生から二十年という事で、テレビで特集番組が組まれ、改めて恐ろしい事件に向き合う事に成った。最高の教育を受けた優秀な人々がオウムにのめり込み、常識から外れた行動にも平気で関わるようになっていった経緯は未だに解明されていない。

世の中の不合理に耐えられず、さ迷う若者の心の隙に言葉巧みに入り込み操った麻原（松本智津夫死刑囚）は何も語らず、黙秘を続けているというが、その心を断ち割って覗いてみたい。今も麻原を信じ、事件後に設立された「アレフ」への入信者が増え続けていると言う現状をどの様に理解すればいいのだろう。若しかしたら、心の闇を抱えた若者たちが必死で明かりを探しているのかもしれない。番組の中で元の信者が入信していた頃を懐かしそうに話していた姿が忘れられない。

青少年の凶悪犯罪も増え続けている。命の短さを実感している八十路婆には、二度と返らぬ今日という日を大切にしない若者の姿がもどかしくてならない。（と言いつつ、今は老残の日々を無為に過ごしている私です）

高校野球の中継を楽しみながら、まだまだ日本の将来は大丈夫と少し明るくなっていた所へ、ドイツ格安航空のジャーマンウィングスが急降下の果てに墜落したと言うニュースが飛び込んできた。またテロかと一瞬ドキッとしたが、テロとは無関係らしいという。しかし此処でも働き盛りの日本人二人が犠牲になってしまった。

その後ボイスレコーダーが回収されて、副操縦士の自爆らしいというところでもない真実が明らか

になった。また二十八才だという副操縦士が何の関係もない多くの乗客を巻き込んでしまった心の闇は何だったのだろう、周囲の人も築かぬ孤独の深さと、犠牲に成った遺族の悲しみを思う時胸一杯になってしまふ。きつちりと原因を解明して、このような悲劇が二度と起こらぬように対策を講じてほしいと願うばかり。

陸平をヨイショする会の発足二十周年の記念事業として「陸平貝塚の保存と活用を未来に繋ぐ記念碑建立の会」が設立され、村民全体を巻き込んだ事業に発展、一年余りの努力が実り、縄文広場に「陸平よ はるかに」の歌碑が建立され、三月二十九日に除幕式が行われた。

若い世話人四名の努力もあって寄付をされた方はほぼ二百名に上り、除幕式参加の人も約百名、村を挙げてのイベントとなった。心配された空模様も皆の熱気で嬉しい予報はずれ、タブの木の風が心地よい上天気にも恵まれ、笑顔あふれる素晴らしい式典に成った。

キビキビと進行役を務める我が子と同年代の世話人達を見乍ら世代交代の嬉しい予兆に嬉しさと寂しさを感じていた私。

生まれたばかりの歌碑の前で全員が歌った「陸平よ はるかに」の歌声が縄文の広場に響き渡った。

暗いニュースが多い地球に春がやってきた。日本の春は何といっても桜。桜前線の北上に合わせて旅を重ねる幸せな人も多い。私たちはせめて世界の平和を願いつつ、仲間と一緒に花見酒でも酌み交わしたいものだ。

花を愛でるゆとりの心が明日を生きてゆく力になってゆく。

《読者投稿》

養生日記（詩二編）

堀江実穂

『虐待』

もう怯えなくてもいいの
人にびくびくしなくてもいいの
おどおどしなくてもいいの
人が怖ろしかった過去へはもう戻らなくてもいいから

今、幸せを感じている

おいしく食事ができる事
ゆつくり暖かい風呂に入れる事
汚れた洋服を洗濯機で洗える事
冷蔵庫を誰気兼ねなく使える事
電子レンジを自由に使える事
電話やメールができる事
ピアノが弾けフルートを吹ける事

誰にも脅かされる事なく毎日を生活できる
私はやっと自分を取り戻し自由を取り戻した
「嫁」という奴隷の世界から
昔の話ではない
つい昨日の話です

今日は自分のペースで暮らしをつくり、喜び、
生きていることを実感している

『未来へ』

過去を思いだし苦しむ私がいる
現実を見てがっかりする私がいる
過去を思い出しても過去の映像は変えることは

出来ない

過去の失敗も過去の失恋も過去の栄光もすべて過ぎ去ってしまったもの

決して戻ってくることはない

しかし、消し去ることも出来ない

いま私の欲しいものは明日

明日は希望という未来

明日は期待を思える未来

明日という白いキャンバスに塗りたい色を夢見る幸せに感謝

《一寸一言・もう一言》

一寸一言

遠い国と昔の話

打田昇三

「美しき青きドナウ」として知られるドナウ川はバルカン山脈に沿って流れ先史時代から民族移動や文化交流に重要な役割を果たしていた。山脈の南はドナウに見放された僻地になるのだが其の僻地の小国マケドニアの王子として生まれたのがアレキサンダーである。

マケドニアの敵はアドリア海沿岸部に居たバルカン最古の民族・イリュリ人である。アレキサンダーは山を越えてドナウ川下流域を抑え、イリュリを平定した後に東征に向かった。当時の世界とは「古代オリエント」であり、支配したアレキサンダーが「世界征服者」となったのである。

西暦紀元前三二三年の夏、古都バビロンで病に倒れた征服王は、ドナウ下流域からギリシア一帯に在った文化を東洋に伝える道筋をつけて波乱の

生涯を終えた。「ヘレニズム」と呼ばれる其の伝来文化のうち、日本に現存する顕著なものは仏像・卒塔婆・塔・火葬などインド・中国・朝鮮を経由して来た仏教関連の事項が多い。

二千数百年を経て幾多の地域・国家が栄枯盛衰を繰り返し名称が変わった。中国は夏・殷・周・秦・漢・隋・唐・宋・元・明・清などに、韓国も新羅・高麗・李氏朝鮮から現在の二大？国に：幸か不幸か、日本は支配者が変わっても国名までは変えなかった。「日本」という誰でも書ける簡単な文字が良かったのかも知れない。

「3・11」茨城のデータ

菅原茂美

東日本大震災・県内の実状を読売新聞から抜粋。

地震 2011年3月11日午後2時46分マグニチュード(M)9の巨大地震が三陸沖に発生(3時15分茨城沖でM7.1の余震、銚田市で震度6強) 高萩市など8市が

震度6強、水戸・石岡市など6弱。住宅全壊288棟、半壊2305棟。停電8万戸。死者24名、行方不明者1名。**津波**北茨城6.9m、鹿嶋港水路6.6m、4時5分大洗4.1m、津波浸水面積17.9平方km。**放射能**東京電力福島第一原発事故により、放射性物質県内全域に拡散。16日午前11時40分北茨城市で15.8マイクローシーベルト。20市町村が

「汚染状況重点調査地域」に指定。農水産物の出荷停止・自粛。風評被害甚大。**液状化**潮来・鹿嶋など36市町村で住宅被害9333棟。電気や上下水道施設が損傷。道路の隆起・陥没多発。**計画停電**

14日夕茨城県内で東電が実施。避難者の猛烈な反発により知事が東電に抗議。東電は翌朝解除。**被**

害額インフラ被害額県関連施設道路・橋など7億円、港湾2.5億円。農業被害額3.4億円、漁業被害額659億円。漁船流失・沈没・破損など488億円。漁港施設・漁場海岸施設など427億円。東電への賠償請求額農畜産物等110億円、同海産物請求額340億円。県内の地震保険支払額1599億円。

社会や民間が抱える施設など本県の被害総額2.5兆円。**避難者**学校など594避難所への避難者数は7286人。福島県からの原発事故避難者数は21日現在1865人。このうち疲労などで41人が死亡。15年2月12日現在、仮設住宅で暮らす避難者は4264人。そのうち福島県からの避難者数は3461人。

その他数字不明だが電話不通、物流停滞、ガソリン・食品・水等不足。

もう一言

「暫定入学」

菅原茂美

秋田市にある「国際教養大学」に「暫定入学制度」があり、今年101人の正合格者の他に3人の暫定入学者が名を連ねたという。一定の成績を残せば1年後、正規に編入される。正規入学者が4年で卒業できる率は半数なのに対し、暫定入学者は開学04年以來66人中、65人が見事に4年で卒業したという(読売新聞)。暫定入学制度は外国では普通に行われ一定のレベルがあれば、入学の間口は広いが、卒業という出口は非常に厳しい。日本の大学のように入ってしまえば、遊んでいても卒業証書がもらえるというものではない。

現在世界中で、大学を中退した学生の割合(08年OECD調べ)は平均すると31%。アメリカ5.4%、

フィンランド28%、フランス21%、韓国15%、日本11%。日本は勤勉だから少ないのではなく、成績が悪いため卒業させなければ、親などからの抗議が強すぎるからであろう。自由・平等の精神を履き違えている。小学生の分數計算もできない大学生は、決して卒業させてはいけない。

さて、合格点にわずかに届かない、1点刻みの試験結果で、人生が左右される今日の日本の受験制度には、日頃から疑問を感じていた。文科省の中央教育審議会は、現在のセンター試験を改め「大入学生希望者学力評価テスト（仮称）」に改め、新たな選抜方法を検討中という。1点刻みではなく、段階別に評価し、優れた人材が、切り捨てられるのを防ぐ可能性が大きくなる。

国家の隆盛は、第一に教育にあり……と考える。貧困家庭の子弟の教育機会均等は国の責務だ。道徳教育はまず家庭から。親の背を見て子は育つ。寛容精神の育成が、社会の安定をもたらす。

金刀比羅宮

打田昇三

金刀比羅宮の祭神「大物主命」とは日本列島の開発者とも言うべき大国主命の靈魂らしい。特記すべきは其処に崇徳天皇（上皇）が祀られていることである。保元の乱に敗れた上皇は「……松柏は奥深く茂りあひて、青雲のたなびく日すら小雨降るがごとし……（雨月物語）」と言うような山深い讃岐の綾松山（黒木御所）に流された。西暦一五六年旧暦七月二十三日のことである。

言うなれば皇位を争って負けたのであるから高級ホテルは望めないにしても、先々代の天皇から

一夜にして四国山中の誰も行かない古寺に幽閉されたことへの恨みは深い。さらに当時は三百年以上に亘り停止されていた死罪が、崇徳上皇方に付いて負けた武士たちに適用されたのであるから「怒るな……」と言う方が無理かも知れない。

世を恨んで荒れ狂ったような日々を送っていた崇徳上皇は長寛二年（二六四）八月二十六日、配所で悶え死にした。享年四十六歳。都にいた後白河法皇始め勝者たちは安堵したと思うが、間もなく戦乱、飢饉、洪水などが此の国を襲った。

慌てた政府は「是は崇徳上皇の祟り！」として院号を贈り京都の白峯宮に祀るなど鎮魂対策を行い翌年には讃岐の金刀比羅宮に祭祀した。石岡にも金刀比羅宮が勧請されている。現代は神様も御多忙なので安易に崇めることは無いと思うが、念の為に私も時々参拝している。

【特別企画】

打田昇三の『私本平家物語』

巻第二（五・二）

康頼祝言（やすよりのりと）のこと

山門の滅亡から善光寺の火災まで、自業自得とも思える仏教界没落の話の後に「康頼祝言」が出て来たのは意外な展開であるが、この場合の祝言とは結婚式のことではないらしい。現在では神主さんしか用の無い祝詞（のりと）のことである。

仏教界の荒廃に関する章段が続いた後に「のりと」

を持つて来る辺りは編集者も気を使ったらしいが、内容は神仏信仰と御利益の具体例である。それでも孤島に流された者たちの必死の祈りとして書かれてあるから、同じ部類ながら奢りの果てに没落した仏教界の自業自得とは違うように思えて「山門滅亡」などと一緒にはしたくない内容ではあるが、作者の狙いは「熊野信仰の御利益」を宣伝する話なので本質的には同じである。

さて平家打倒の企てに参画した同志の中で中心人物と言うか首謀者である後白河法皇は、平重盛のお蔭で当面は何も知らなかったような顔をしていられたけれども、法皇側近の西光は直ぐに首を刎ねられ、参謀の藤原成親は流罪から格上げで殺害されてしまった。そして僧侶の俊寛と平康頼と成親の息子の丹波少将と呼ばれていた成経の三人は鬼界が島に流されていた。他の者も各地に流されていたのだが島ではなかったらしい。平清盛としては身内同然の成親父子の叛逆が許せなかったので、弟の嘆願を無視して成経を島流しにした。

普通に考えれば、碌な食料も飲み水さえも十分は無いような鬼界が島に流されたのであるからその状態は正に露の命、草葉に宿った水滴のように儂く消えて行くところである。本人たちも運命であるから諦めており命を惜しむ訳では無かったけれども幸いにして「大納言死去」の章段で述べたように藤原成経の舅（妻の父）は清盛の弟で門脇宰相又は平宰相と呼ばれていた平教盛であったから出来る限りの援助をしてくれたのである。

都合の良いことに教盛の領地が九州に在った。其処は肥前国加瀬庄と言つて現在の佐賀市加瀬であるから加瀬川から有明海へ天草灘などを經由する船路で鬼界が島に救援物資を届けることが出来たのである。

る。そのお蔭で二人の受刑者は生きて居られた。三人のうち平康頼は島に送られるに先立って周防国(すほうのくに)山口県山口の室積むろつみという所で出家していて法名を性照(しょうしょう)と名付けて貰った。自ら望みでの出家であつて、次のような歌を詠んだ。

「つひにかく そむきはてたる 世間(よのなか)を とく(速く)捨てざりし ことぞくやしき」

藤原成経も丹波少将と呼ばれていたから二人のしようしようで少々不便な暮らしをしていたのである。平教盛からの援助があつたから、一般の庶民よりは良い暮らしであつたろう。

此の二人は共に信心深い性格であり、熊野三所権現を鬼界が島に勧請して都に帰ることが出来るように祈願しようと思ひ立つた。三所権現とは、熊野三山と呼ばれた①熊野本宮こと熊野坐神社(くまのいますじんじや) ②熊野新宮こと熊野速玉神社 ③那智大社こと熊野夫須美(ふすみ)神社の三社である。熊野神社はサッカーのエンブレムになっている「八咫鳥(やたがらす)」が神様の使いである。この鳥は韓国産らしい。「熊野」の名称は朝鮮半島から伝わったツングース系統の熊信仰と関連づけられている。本来は外来の神様かも知れないが、日本に定着して森林(大自燃)の神として祀られたのである。日本神話の「天孫降臨」も同系統の話と考えられているが、朝鮮半島では降りて来た神様が村民と融和するのに、日本の神話は威圧的で最初から強盗並みに威張っている。これは本来の日本列島住民が、海の向こうの異民族に侵略・支配された証拠であろう。

それは兎も角、二人のしようしようは、熊野神社勧請のことを俊寛僧都に相談したのだが、俊寛は生まれつき信仰心が全くない人物なので同意しなかつた。原原本にはそう書いてあるが俊寛は真言宗の僧侶

であるから、信仰心が無かつた訳ではあるまい。僧侶の身であるから神仏混淆の時代でも熊野神社に頼りたくなかつたのかも知れない。

結局、丹波少将と康頼入道の二人が熊野神社勧請計画を進めることになり、島の中で少しでも熊野神社に似ている場所が無いかと、全島を探し回つたのである。すると絶海の孤島ではあるが奥の方を探して回ると美しい林が連なつていたり錦の織物を広げたとように花々が咲き乱れている野原があつたり、或いは神秘的な高い山々が雲の間を突き抜けていて、緑の広がる場所の色も単調な一色では無く、山の景色や木立の様子に至るまで、此の島の景観は、今まで見て来た他の土地よりも優れているように思えてきたのである。

島の南は広々とした海で打ち寄せる波が雲か煙のように霞んで見える。北を見れば険しく聳え立つ山々から瀧水がみなぎり落ちて恐ろしいほどの音を立てている。松林を吹き通る風は神々しく、さながら飛瀧権現(ひりゅうごんげん)瀧の神格化が鎮座する那智山に似た景観が広がる。其の場所を見つけた二人は早速に「那智のお山」と名付けて在る峯は本宮に、別な峯は新宮になぞらえたほか、小さな峯や然るべき場所は熊野と同じように三山の末社に当てはめて俗に「九十九王子」と呼ばれて熊野の参道に置かれた多数の小社とすることにしたのである。

「鯛の頭も信心から」と言うが、宗教は思い込みの世界であるから自分が良ければ其れで良い。二人は康頼入道先達(せんだつ)修行の先輩、教導者として日々に熊野参詣の真似事を開始し自分たちが早く都へ戻れることを祈願し続けたのである。お願いのセリフは宗教の教範どおりに、「南無権現金剛童子(なむこんげんこんごうどうじ)仏様、衆生を救う為に仮の姿で

現れた菩薩願わくば、どうか憐みを垂れさせ給い、私たち、此の島に流罪となつた者を郷里に返して下さい。妻や子に再会させて下さい。」である。

島流しに遭つた者は就職する必要も無いので暇であるから、二人は熊野に見立てた鬼界が島の霊場霊場に毎日毎日通つていたのである。霊場で祈願をするには其れなりの淨衣が必要だが島には無い。着のみ着の俣の衣服も其の中に汚れたり痛んだりしてくる。幸いに亜熱帯に近い島であるから防寒衣は要らない。送られてきた食糧の袋などを着衣に替えて二人は谷川などで身を清めつつ、襦袢(ほろ)を着て、其処を熊野の岩田川だと思ひ、小高い場所は熊野本宮の総門だと仮定して一心に祈願をしていたのである。

通常の社寺に祈願する場合にはお賽銭なり御布施が必要であるけれども、それが無い。尤も孤島に店は無いらぬ現金も要らないが、仮設の熊野神社に参拝を続ける二人は願ひ事を神仏に知つて貰うのに祝詞(のりと)を上げたいのだが、紙は幣束を作る分さえ無いから祝詞も書けない。その辺に咲いている野の花を手折つて捧げながら、康頼入道が祝言を言葉だけで奏上することにした。

現代でさえ、神職が唱える「のりと」を聞き分けようとしても所々に牛の鳴き声のような伴奏が入つて良く分らない。平安時代には尚更であるが、此の場合は康頼入道が即興で奏上したので、神仏への願ひの大筋は「早く都へ戻りたい」ということである。それを神仏に判つて貰えるように難しい言葉で次のように言つたのである。

「惟あたれる歳次、治承元年丁酉月の並び十月二月、日の数三百五十余か日、吉日良辰を択んで、掛けまくも忝く、日本第一大領熊野三所権現・飛龍大薩の教令、宇豆の広前にして、信心の大施主、

羽林藤藤臙經照一心清淨の誠を致し、三

業相應の志を抽て、謹んでもつて敬白。―いあたれるさいじとくにこむじしようがんねん、ひのととり、つきのならば、とつきふたつき(十月)ひのかず、さんびやくごじゅうよかにち(二月)、きちにちりょうしんをえらんで、かけまくもかたじけなく、にほんだいいち、だいらりょうげん、ゆや(熊野の尊詭)さんしょごんげん、ひりゅうだいきつたのきようれい、うずのひろまえ(尊い神仏の前)にして、しんじんのだいせしゆ、うりん(近衛府の役人)ふじわらのなりつね、ならばにしゃみ(在家の僧)しようしよう、いっしんせいじようのまことをいたし、さんぎようそうおうのころざしをぬきんで、つつしんでもつてうやまつてもうす―

夫、証誠大菩薩は濟度苦海の教主、三身円満の覺王也。或、東方淨瑠璃醫王の主、衆病悉除の如来也。或、南方墮落能化の主、入重玄門の居士、若王子は娑婆世界の本主、施無畏者の大士、頂上の仏面を現じて、衆生の所願をみて給へり。是によつて、かみ一人よりしも万民に至るまで、或、現世安穩のため、或、後生善処のために、朝には淨水を結んで煩惱の垢を濯ぎ、夕には深山に向て寶号を唱るに感應怠る事なし。

―それ、しようじようだいぼさつ(熊野本宮本尊)はさいどくかいのきゆうしゆ、さんじんえんまんのかくおうなり。あるいは、とうぼうじようりいおうのしゆ、しゆびようしつじよのよらい(薬師如来)なり。あるいはなんぼうふだらくのうげのしゆ(千手觀音)、にゅうじゅうげんもんのだいい(菩薩)、にやこうじはしゃばせかいのほんじゆ、せむいのだいい(觀世音菩薩)、ちようじようのぶつめんをげんじて、しゆじようのしよがんをみてたまへり。これによつ

て、かみいちじん(天皇)よりしもばんみんにいたるまで、あるいはげんぜあんおんのためあるいはごしようぜんしよのために、あしたにはじようすいをむすんでぼんのうのあかをすすぎ、ゆうべにはしんざんにむかつてほうごうをとなるにかんおうおこたることなし―

峨々たる峯の高きをば、神徳の高きに喩へ、嶮々たる谷の深きをば、弘誓の深きに准へて、雲を分けて登り、露を凌いで下る。爰に利益の地を頼まずむば、如何が歩を嶮難の路に運ばん。権現の徳を仰がずんば、何必しも幽遠の境にましまさむ。

―ががたるみねのたかきおぼ、しんとくのたかきにとえ、けんけんたるたにのふかきおぼ、ぐせいのふかきになぞらえて、くもをわけてのぼり、つゆをしのいでくだる。ここにりやくのちをたのますんば、いかにあゆみをけんなんのみちにはこぼん。ごんげんのとくをあおがずんば、なんぞかならずしもゆうえんのさかいにましまさん―

仍誦誠毒權懇悲飛離衣權並

べ、さお鹿の御耳を振り立てて、我らが無二の丹城を知見して、一々の懇志を納受し給へ。然則、結・早玉の両所権現、各機に随て、有縁の衆生を導き、無縁の群類を救はんが為に、七寶莊嚴の栖を捨てて、八万四千の光を和げ、六道三有の塵に同じ給へり。故に、定業亦能転、求長寿得長寿の礼拜、袖を連ね、弊帛礼篋を捧る事暇無し。忍辱の衣を重、覺道の花を捧て、神殿の床を動し、信心の水を澄まして、利生の池を湛たり。

―よつて、しようせいだいごんげん・ひりゅうだいいさつた、しようれんじひのまなじりをあいならべ、さおしかのおんみみをふりたてて(鹿が敏感に耳で聞くように)われらがむにのたんぜいをちけんして、いち

いちのこんしをのうじゆしたまへ。しからばすなわち「むすぶ・はやたま」のりようしようごんげん、おのおのきにしたがつて、うえんのしゆじようをみちびき、むえんのぐんるいをすくわんがために、しつぼうしようごんのすみかをすてて、はちまんしせんのみかりをやわらげ、ろくどうさんうのちりにどうじたまへり。かるがゆえに、じようごうやくのうてん、ぐちようじゆとくじようじゆのらいいは、そでをつらね、へいはくれてんをささぐるこひまなし。にんにくのころもをかさね、かくどうのはなをささげて、しんでんのゆかをうごかし、しんじんのみずをすまして、りししようのいけをたたえたり―

神明納受し給はば、所願何ぞ成就せざらん。仰願は十二所権現、利生の翅を並て、遙に苦海の空に翔り、左遷の愁を安めて帰洛の本懐を遂げしめ給へ。再拜

―しんめいのうじゆしたまはば、しよがんなんぞじようじゆせざらん。あおぎねがわくはじゆうにしよごんげん(三所権現、五所王子、四所明神の総称)、りしよのつばさをならべて、はるかにくかいのそらにかけり、させんのうれいをやすめて、きらくのほんかいをとげしめたまへ…さいはい。

書くのも、読んで頂くのも一苦勞な文章であるが、鬼界が島から帰りたい丹波少将と康頼入道が熊野の神仏を勝手に勧請して、神仏も忙しいのに都合も考えずに呼び出して、お願いに奏上した祝言(のっこ)はこの様な内容であった。くどいように頼んでゐるのは「早くこの島から出して下さい…」という一言に尽きるのであるから、それだけ言えば良いのに、無駄に長過ぎる文である。

卒都婆流(そとばながし)のこと

丹波少将藤原成経と康頼入道・平康頼は自分たちで勝手に島内に勧請した熊野三所権現の御前に詣でて、都に戻れる日が来ることを祈っていた。仕事を持っていた訳ではないから、暇は幾らでもある。時には葬儀の通夜のように夜どうして其処に居ることもあった。或る夜のこと二人がその場を去らず、退屈のぎに流行歌と言っても一人は都を離れて久しいので、少し古い歌を口ずさんだりして過ごしていた時に、眠りかけた康頼入道が夢を見た。以下は夢の中の話である。

沖から白い帆を張った小船が一艘、漕ぎ寄せてきた。船の中には紅色の袴を着けた女房たちが数十人乗っていて（小船に数十人も乗れる訳は無いのだが、夢で有るから大目に見て）その者たちが島に上がり多分、浜辺で鼓（つづみ）を打ち鳴らし声を合わせて歌い出した。

♪よるずの仏の顔よりも

千手の誓いぞたのもしき

♪枯れたる草木も忽ちに

花咲き実生るとこそ聞け

多少、調子の合わない点もあるが此の下手な歌を、しつこく三回も歌ってから、数十人がふつと消えてしまったのである……目が覚めてから康頼入道は、是は単なる夢では無いと思ひ……（正確には思ひ込み）丹波少将に言った。

「是はきつと、龍神が女房たちに姿を変えて出現されたのでしょう。熊野三所権現のうち、「西の御前」と申される神（那智大社の祭神・熊野夫須美神と思われる）は本地仏が千手観音です。龍神は即ち千手観音に仕える二十八部衆（二十八人？の家来）の一人（神）ですから、その神が姿を変えて夢の中に出現されたことは、我らの願いが神々に御受納頂けたのでしょう。これ

は有難いことです……」と勝手に解釈して喜んだ。「鯛の頭も信心から」という諺がある。好きなようにすれば良いが、熊野神社は祭神と神社の関係が複雑で、それが本地垂迹説（ほんじすいじやくせつ＝神仏同体説）と絡んで内容が分かり難いので、解釈に誤りがあったらお許し頂きたい。

兎に角、中途半端な夢を見て、すっかり其の気になつた二人は、またしても不思議な夢を見た。海に向かつて、沖から吹いて来る風を受けていて二人に木の葉が舞い落ち、それぞれの袂（たもと）に入り込んだ。二人はボロボロの衣服を着ていたのであるから物が入る袂が有る筈は無いのだが、夢であるから……飛んできたのが熊野神社の御神木（横科常緑樹のナギ）の葉である。その葉が虫食い状態で、虫食いの跡が歌になつていた。（アホ）

千早ふる神に祈りのしるければ（熱心なら）

などか都へ帰らざるべき

これに力を得た康頼入道は、都へ帰りたいという思いが一層、強くなつて、少しでも効果が有るようにと「卒都婆（せとば）＝塔を意味するサンスクリット語のストウパが語源と言われる」を千本作り、梵字の最初の文字、年号、月、日、俗名、実名、それに次の二首の歌を書き付けた。

薩摩湯沖の小島に我ありと

親には告げよ八重の潮風

思ひやれ暫しと思ふ旅だにも

なほ古郷は恋しきもの

是を海岸に持ち出して「南無帰命頂礼、梵天、帝釈、四大天王、堅牢地神、王城鎮守諸大明神、殊には熊野権現、厳島大明神、せめて一本でも都に届けて下さい……」つまり、自分が知っている限りの神様や仏様の名前を呼んで、卒都婆が知人に届くように

願つたのである。冷静に考えれば神仏でも競争意識は有ると思うので、やたらと相手の名を呼び出して効果は薄い。

その塔婆が手作りの粗末なものでも簡単には出来ないと思うので、康頼入道は出来たものから一枚（本）ずつ海に投じていたのである。毎日毎日のことなので其の数も千本になつた。そうした努力が通じたのか或いは神仏の御加護があつたのか偶然なのか、正確には潮流の影響であろうが、千本のうちの一本が流れ流れて安芸国厳島大明神前の渚に打ち上げられたのである。

嘘か真実は知らないが話は上手く出来ているもので其の頃、康頼入道に縁のある一人の僧が何とかして流罪になつている島に渡つて消息を尋ねてみたいと思ひつき、修行を兼ねて西の国へと旅立つた。先ず手初に有名な安芸の宮島・厳島神社へ参詣したのであるが、其の際に神社に仕える人物らしい者が出て来て旅の僧と話をした。会話の中で僧が「和光同塵（わこうどうじん＝知恵の有る者が凡人に同化して交わる。此の場合は仏が慈悲を示す）の御利益は様々と言われるが、厳島神社の神々は、どの様な因縁で大海の魚類に縁を結ばせられるのであるか？」と質問をした。

その宮人が答えるには「娑羯羅龍王（しゃかつらりゅうおう＝海の王）の本地は天照大神であるが、其の第三の姫君（市杵島姫）が大日如来の垂迹（仮の姿）として厳島神社に祀られているからである――厳島（いづくしま）は海の神を祀（いつき）祭る……ことである」と、此の島に神仏が衆生を救うために来臨された由来を述べた。宗教の世界の話であるから是を信ずるかどうかは本人の意思であるが、此の僧は百%信用して一心に経を読み（神社であるが神仏混淆時代なので）本殿社殿など荘厳な建物や潮の満ち干で変わる様子に心を

奪われる思いで見入っていたのである。

折りから日も暮れて、月明かりが海面を照らし始めた頃、幾らかの藻屑が波に揺られている中で一枚の卒都婆が打ち寄せられているのが見えた。さすがに僧であるから、何気なく是を拾い上げてみると「沖の小島に我在り…」として康頼入道の名が刻み込まれていた。波風や潮流に消されることもなく明らかに読み取れたのは奇跡に近い。

僧は此の卒都婆を背負い箱に納め、直ちに都に戻って一条の北、紫野にひっそりと暮らしていた康頼入道の家族（仏門に帰依した老母、妻子など）に見せたのである。家族にしてみれば、康頼の生存は確認できても戻れる当てが無い以上は、生きて此の世に合うことが叶わぬならば喜ぶこともできず「此の卒都婆が中国大陸の方へでも揺られて行けば良かったのに、なぜ本土に流れ着いて、逢えぬ身に今さら悲しみを思い起こさせるのか…」と悲しむばかりであった。

是で終わると、敵島から卒都婆を担いできた坊さんは無駄骨どころか余計なことをした人物になるのであるが此のこと（康頼の卒都婆の話）が都の評判になり、それが後白河法皇にも伝わった。法皇は問題の卒都婆を取り寄せてご覧になり「無残なことである。此の者たちは、良くぞ無事に生きてきたもの…」と涙を流された。そして、嫌がらせでは無いと思うが、問題の卒都婆を平重盛の許に送らせた。重盛も（島流し）自分の所為にされたのでは嫌なので直ぐに平清盛に転送した。

昔、柿本人丸は古今集に「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」と読んだ。また、山辺赤人は「和歌の浦に潮満ち来ればかたをなみ葦べをさしてたづ（鶴）鳴きわたる」と葦辺の鶴を風流

の目で眺めた。また新古今集には船の安全を守る住

吉明神の「夜や寒き衣（ころも）や薄き片削（かたそぎ）のゆきあいの間より霜や置くらむ」の歌があり、大和三輪山の大物主命を祀る明神には「恋しくほとぶらい（訪ね）来ませわが宿は三輪の山もと杉立てる門」がある。神代に素盞鳥尊（すさのうのみこと）が三十一文字の大和歌（和歌）を始めて以来、諸神、仏陀も其の方法で種々の思いを述べている。因みに、和歌の始めとされる素盞鳥尊の歌は、古事記に記された

「や雲立つ 出雲八重垣 妻隠みに
八重垣作る その八重垣を」である。

和歌は人の心を動かす。結局、平清盛も人間であるから（山石や木草などで無く）遙々と流れ着いた康頼入道の卒都婆（望郷の思いを述べた和歌が記されていた）を見て心を動かされたのである。

蘇武（そぶ）のこと

この章段は巻第二の最後になる。前章段の「卒都婆流し」を受けているのだが、最初の数行を除いては表題のとおり古代中国（前漢）の時代に敵対する遊牧民族（匈奴（きょうど））に使者として行き（副將軍として攻め入ったとする説もある）捕えられて十九年間の抑留生活を送りながら節を曲げず遂に帰国を成就した「蘇武」の話である。それを康頼入道の苦勞（卒都婆流し）になぞらえて奇跡と人間の執念を強調したらしい。既に熊野神社や海の神の御利益を称えているのであるから異国の例を出す迄も無いと思うが、平家物語作者にしてみれば当時の先進国であった中国古代の寓話で話を付ける心算であったのか…。

鬼界が島から安芸の宮島に流れ着いた卒都婆は康

頼入道が千本も手作りした中の一枚であるから小さな粗末なものではあつたけれども、それが遠く薩摩瀧から都にまで到来したのは不思議な縁である。それに刻み込まれた望郷の歌には多くの人々が心を揺り動かされ、さしもの平清盛さえも憐みの気持ちを持つたのであるから、都中の人々が其の歌を覚えては口ずさんでいた。

其の昔、漢（かん）の国にも、似た様な言うか人間の執念を物語る「蘇武」の話が伝えられている。

漢の国は高祖劉邦（りゅうほう）が長安に都を置いた「前漢」と、二百数十年後に光武帝劉秀が洛陽に再興した「後漢」があるが、蘇武は前漢第七代の武帝（紀元前四十年即位）に仕えた重臣である。一般に知られている事績は当時、漢に服従しない匈奴（きょうど）モンゴル系遊牧民族の許へ平和交渉に訪れたまゝ抑留されたらしいのだが、平家物語原本では軍隊を率いて攻め込んだことになっているから其れに従う。

現代でもそう言う兆候は有るが、大国は自分の意に沿わない国が気になって仕方が無いもので、ローマ帝国が未だ小さな共和国でしかなかった当時の世界帝国である「漢」にとつて、周辺でチヨロチヨロする遊牧民族が目ざわりである。そこで漢王（武帝）は李少卿（りしょうけい、本名は李陵）を將軍として三十万の軍勢を差し向け北方遊牧民族の匈奴（きょうど）を討伐することにした。

三十万の大軍が有れば、どう間違えても勝てそうなものであるが、遊牧民軸は神出鬼没で戦いに慣れているから、大將軍の李少卿は捕虜になり、数ばかりで烏合の衆に等しい漢の軍勢は全滅させられた。怒った武王は蘇武を大將軍にして兵力も五十万に増やしたけれども、同じように負けてしまった。原本には「えびす（匈奴）の戦いこはく（強く）して」とあ

るが、味方が弱かったので捕虜になった者が六千人ほど居た。匈奴の連中は捕虜の中から蘇武以下六百三十余人を選び出して片足を斬り追放した。程なく死ぬ者も多く、苦しんでから絶命する者もいたが、蘇武は何とか生き延びた。片足の身になって山の木の実を拾い、春には小川や沼の芹(せり)などを摘んで食べ、秋には田の畔(あぜ)に落ちていた稲穂を拾うなどして辛うじて命を保ったのである。

稲田には雁(かり・がん)が群れていたけれども蘇武に見慣れて恐れなかった。蘇武は渡り鳥の雁が自分の故国にも行くことに気付いて、懐かしく思うと共に是を連絡の手段とすることにした。自分の状況などを書いて丈夫そうな雁を選び、「この文を漢王にお届けせよ！」と言い含めて脚に結びつけたのである。

―此の話を素直に信用すれば良いのであるが、片足で逃亡生活をしている蘇武に紙や筆記具など無く手紙を書ける筈が無い。源平盛衰記では自分の指を喰い切つて血文を書いたことになっているが貴重な紙はどうしたのか？平家物語の作者が苦勞をして創作した話であるから原文のまま紹介はするが、蘇武は皇帝の命令で「降伏勧告」の使者として匈奴に行き、捕らえられて逆に匈奴に仕えるように言われたのである。それを拒否した為に抑留されて衣食を絶たれながらも節を曲げず、二十年近く経つてから遂に帰国することが出来た…とするのが定説である。

ともかく、面倒なことを頼まれた雁は漢の都まで飛んで、宮殿付近の上空を回りながら皇帝の出でくるのを待っていた。その頃の皇帝は武王の子で第八代になる昭帝であった。都合よく上林苑という西安西方に在った庭園に遊びに出て来たので雁は自分の脚に結びつけられた手紙の結び目を嘴(くちばし)でほじき、皇帝の身近に落した。

側近の役人が是を拾って皇帝に奉じ、皇帝が開いてみると血文字で悲壮な状況が記されていた。「昔は岩屋の洞窟に閉じ込められて三年を過ごし、今は荒れ果てた田園の畝(うね)に捨てられて敵地で片足の身になり逃亡放浪の日々を送っています。此のまま異国に屍(しかばね)を晒すことになっても、魂は国に帰り、再び皇帝にお仕え致します…」このことが由来となつて手紙のことを「雁書(がんしょ)」「雁札」＝雁の使い」と言うようになったのである。

敵国で壮絶な日々を送る蘇武の生存を知った皇帝は「是こそ悲壮なる蘇武の誉の証拠である！」として、蘇武救出の目的もあり、李広(りこう)と言う將軍に百万の軍勢を付けて匈奴の地へ遠征させた。將軍がこうだった所為かどうか、今度は漢の軍勢が勝利した。其の時に戦場となった広野の一角から片足の人物が這い出してきて「私が蘇武です！」と申告した。こうして蘇武は漢の軍勢に収容され、大切に輿に乗せられて故国に帰還する事が出来たのである。

蘇武が戦場に向かったのは十六歳の時であり、既に十九年の歳月が過ぎていたのであるが出陣の際に皇帝から下賜された軍旗は、あらゆる状況にも肌身離さず隠し持っていた。それを取り出して皇帝に見せたので、皇帝以下一同が感嘆して大功有る者とされ、多くの領地を賜った。さらに漢の属国を支配する「天俗国(てんしよくこく)」と言う職に就くことが出来た。

一方で、蘇武の上官として出陣した李少卿は捕虜となつて敵地に留まつたまま遂に帰ることが出来なかった。蘇武らが足まで斬られたのに最高指揮官の李少卿が厚遇されたのは不自然であるが、原文に従えば敵国(胡)の王様が許さなかった。

国を願つたのに許されなかった…とあるが是は蘇武のことで有り、蘇武が足を斬られた話が怪しいのである。平家物語原本では、怪しいほうの話李少卿のこととして載せており気の毒に「不忠者」として李少卿の両親の墓が暴かれ、父母、兄弟、妻子が罪に問われた。父母は既に死亡していたが、他の者は生存していたから苦勞した。

是を聞いた李少卿は深く皇帝を恨んだけれども故国を思う気持ちは強く、不忠の無いように配慮した一巻の書を皇帝に捧げた。其れによつて真相が分かったので、皇帝は「不憫であった！」と反省し父母の墓を暴いたことを悔やんだという。

ここで平家物語は、ようやく異国から日本に戻り鬼界が島から卒都婆を流した康頼法師と雁に手紙を託した蘇武とを強引に結びつけるのである。原文に言う：「漢家(漢王朝)に仕えた蘇武は、書(手紙)を雁の翅(つばさ)につけて旧里に送り、本朝(日本)の康頼は、浪の便りに歌を故郷に伝う。彼(蘇武)は一筆のすさみ(なぐさみ)、是は二首の歌、彼は上代(昔)、是は末代(現代)胡国(異国)、鬼界が島、境を隔てて(国は違つても)世々は変れども、風情(人情)は同じ風情、有難かりし(誠に珍しい)事どもである…。(巻第二・終)

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会は、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」を基本軸として、自分の思いや考えを言葉に表現していこうと集まった者達の会です。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、その思いを言葉に表現することで希望の風を吹かせたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

風の言葉絵同好会参加者募集

全てが自由で自在であれ、のふるさと風の会から生まれた、兼平智恵子の風の言葉絵。

この新しい自分表現の「風の言葉絵」を楽しむサークルでは、一緒に言葉と絵を楽しむ参加者を募集しています。

詳しくは、兼平智恵子(☎0299-26-7178)へお問い合わせください。

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

「ことば座団員」&「朗読教室生徒」募集!!

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。

ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。

ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることを言います。物語や詩を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じる必要があります。

何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

月二回程度の授業(受講料:月額 3,000 円)を考えております。

連絡先 080-3125-1307(白井)